

静岡県立静岡がんセンターホームページ
妊孕性温存について



静岡県立静岡がんセンター
妊孕性温存支援委員会
作成日：2026 年 6 月



はじめに

近年、医学の進歩によって多くの患者さんが治療を受けながら日常生活を送っています。がん治療の内容によっては妊娠する力（妊孕性 にんようせい）が失われることもあり、その後の人生を考える上で「妊孕性温存」が必要になる場合があります。

患者さん一人ひとりの病状によって、妊孕性温存が必要か、実施することが可能かどうかは異なるため、詳しくは担当医にご相談ください。

※以下は一例としてがん治療が妊孕性に与える影響、妊孕性温存方法をご紹介します。

がん治療による生殖機能への影響

〈化学療法〉

薬の種類や投与量により、卵巣機能、精子をつくるための造精機能などに影響を与えます。

〈放射線治療〉

どの部位にどれだけ放射線を当てるかにより、卵巣機能、造精機能、脳で分泌される生殖機能に関するホルモンなどに影響を与えます。

〈手術〉

卵巣、子宮、精巣、膀胱摘出などにより子どもを授かることが難しくなります。

〔女性〕妊娠の可能性を残す方法（妊孕性温存療法）

〈未受精卵子凍結〉

がん治療を始める前に卵子をあらかじめ凍結保存しておき、がん治療が終わったあとにその卵子を使って妊娠を目指すことを目的とする方法です。原則として未婚、パートナーのいない方が対象になります。

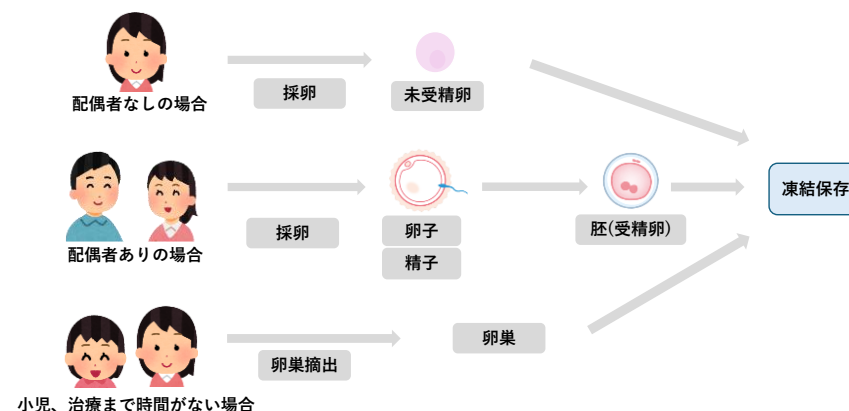
〈胚凍結〉

がん治療を始める前に採卵し、配偶者やパートナーの精子と受精させた卵子（胚）を凍結保存し、がん治療が終わった時に胚を子宮に戻す方法です。一般的に既婚、パートナーのいる女性に対して実施されています。

〈卵巣組織凍結保存〉

がん治療を始める前に卵巣組織を採取して凍結保存する方法であり、初経が来る前の患

者さんやがん治療の時期を遅らせることができない患者さんについて有効とされています。現在ではまだ研究段階とされ、実施できる施設も限られています。



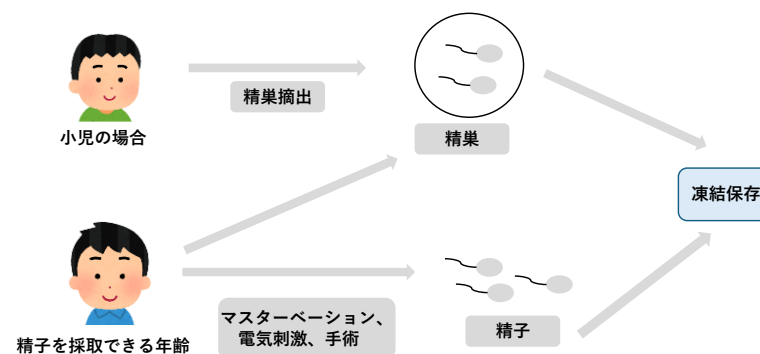
〔男性〕子どもを授かる可能性を残す方法（生殖機能温存方法）

〈精子凍結〉

マスターベーション等により採取した精子を凍結します。がん治療が終わったあとに、その精子を使って子どもを授かることを目指します。

〈精巣内精子採取術〉

マスターベーションで採取した精液中に精子がない場合に、精巣から直接精子を採取して凍結する方法です。（TESE といいます）



※妊孕性温存をおこなったとしても、将来必ず子どもを授かることができるわけではありません。より詳しく知りたい方は、担当医またはよろず相談にご相談ください。